

火星



七曜抄

山尾玉藻

今日あたり冬瓜届きをらむかな

枯葛のきらきら吹かる七五三

ふかふかの座布団に鴨数へをり

二三人夫病んでゐる花八ツ手

冬晴の畳にひとり赤ん坊

猪鍋の一人欠けぬしまま終る

数へ日の筥うへ立てかけてある日向

枯葦の風に春著の吹かれくる

みづうみの真つ平らなり手毬唄

柚子味噌を舐めて大和の冬霞

玉藻俳句鑑賞

案内され餅花の間に待たされぬ 玉藻

〔火星〕平成十三年一月号より

餅花は柳などの枝に紅白の餅をつけて、神棚に捧げる小正月の飾り木の一種。豊作を祈るもの。室町時代より正月の習俗の記述があり、江戸時代の歳時記には極月のものとして記されている。

奥へ通される前にちよつと待たされた部屋の餅花に眼を愉しませている。そのあとのことも思われ、何でもない瞬間の喜びを表現するのは俳句だからこそその思いがする。

(典子)



火星作品 山尾玉藻選

玉砂利に水浮き時代祭かな
姫路松たかし
火祭りのたちまち溪の烟かな
白壁は汚れてゐたり秋遍路
ふたたびの鹿の声なりきら坂
鯛や三和土に吊す狩の服
牛小屋の敷き藁高し十三夜
大阪西畑敦子
お隣の夫婦揃うて松手入
日の匂ひしてたばこ屋の秋深む
椿の実はじけ落ちたり休診日
神杉にのぼりつめたる蔦紅葉
八幡吉田島江
婚礼や宮の一樹にましら茸
脇息や夜の紅葉に囲まれて
襖屋のシャッターの辺の豆筵

黄落のはたてにありし夫婦かな
白菜の残るは茶筌結びかな
鶏小屋に雨の匂ひの黍嵐
黍嵐くぐり戸のあり潜りけり
新松子草鮭結んでもらひたる
火祭の篝小ぶりの一戸かな
天狗山しぐれ雲より日の差し来
かもうりに抱へかたなぞあるものか
到来のかもうり遂に抱へけり
火祭や肅々と里整へり
火祭を逸れぬて虫を聴いてをり
蕪畑に皇宮警察離宮晴れ
南中の刻を渡りし草の絮
灰皿に木犀拾ひ夫とぬる
泡立草押すな押すなの撮影会
父のあと母の入りゆく花野かな
鳥渡るこの組織図のあたらしき

宝塚 杉浦典子

神戸 深澤 鱻

兵庫 大東由美子

選のあとに

山尾 玉藻

言う存在があり、「秋深む」には主そのものの老いが感じられる。同時作のへお隣の夫婦揃うて松手入も佳句であり、ほのぼのとした中に俳諧がある。

黄落のはたてにありし夫婦かな 吉田 島江

「黄落」で先ず眼に飛び込んでくるのは銀杏黄葉であろう。銀杏大樹の黄落は庄巻であり、初老の夫婦には眩し過ぎる。「はたてにをりし」ではなく「はたてにありし」と無機的にしたのがこの句の手柄である。

黍嵐くぐり戸のあり潜りけり 杉浦 典子

「黍嵐」と「くぐり戸のあり潜りけり」は直接の関り付けをしないモンタージュかも知れない。しかし、あの背の高い黍畑の畝と畝との間はトンネル状態になり、それを「くぐり戸のあり潜りけり」と見るのも一興である。「黍嵐」の中を。

かもうりに抱へかたなぞあるものか 深澤 鱧

へ人に見られて冬瓜を抱いてゐる 高明があるが、初めて冬瓜を見た者には同じような発想が浮かぶものだろう。句の良し悪しは別として、抱くと言う点では鱧さんの方に突っ込みがある。「あるものか」と言いながら実際には「抱へかた」があるのである。この句も俳諧味が充分。

玉砂利に水浮き時代祭かな 松 たかし

この度の吟行大会の当日は市街で時代祭も行われ、作者は鞍馬に先駆けて平安神宮へ足を運ばれたらしい。実際前日にかんりの雨が降ったが、時雨が通り過ぎたと想像しても良い。

「時代祭」の行列が艶やかな「玉砂利」に映え愈々雅に輝いたことだろう。確かな詩人の眼がある。同時作のへ白壁は汚れてゐたり秋遍路も秀作。「白壁の汚れ」は春の季節に無かつたものではないが、秋という季節によって見えてきたのである。この作品にも次元の高い詩がある。

日の匂ひしてたばこ屋の秋深む 西畑 敦子

大方の「たばこ屋」は自動販売機に替わつたが、掲句の「たばこ屋」は昔ながらの四辻の角にあり、手渡しで買うことが出来る店である。昔たばこ屋の看板娘を歌つた歌謡曲があったが、今やその看板娘も年老いて座つて店番をしているような雰囲気である。「日の匂ひして」には昔から其処にあったと

灰皿に木犀拾ひ夫とゐる 大東由美子

場所の設定としては自宅の縁側などでも良いし、観光地などの庭に設えられた縁台でも良い。「木犀」を拾っているのは作者である。「灰皿」は陶器よりも硝子の方が「木犀」に合い美しい。夫婦としての静かな時間が流れている。

母の髪乾かしてゐる秋の昼 大山 文子

仮に「秋の昼」を「春の昼」に置き換えるとその句の趣は全く異なってくる。春の場合は行楽にでも一緒に出かける髪を「乾かしてゐる」と捉えるのが普通だろう。しかし掲句の「秋の昼」には自ずと病氣療養中のお母様と位置付けされ鑑賞される。しみじみとした感慨があり、内容も深くなった。

草臥れし音に落ちたる花木権 浜口 高子

ちよつとした計算があるとも考えられるが、作者にとつては実感であろう。計算と言つたのは、他の花に比べ木権の花期が長いことにある。しかし、むしろこの事実が作者にとつては大切なのである。また今日も花が咲き落ちてゆく。「草臥れし音」はやはり実感であろう。

退院の兄の歩幅や芋嵐 高尾 豊子

当然「退院の兄の歩幅」は狭いと言外にある。しかし作者

としてはそれだけを言っているのではない。作者としてはもの心付いた頃より兄は兄なのである。その大きな兄の存在に對しての眼前の歩幅なのである。

霧の川投網打つ音してゐたり 山本 耀子

この句は内容と言うより景で採つた句である。一見して幻想的な情景が脳裏に浮かんでくる。読者には深い霧と投網を打つ音だけで充分、その後眼裏にその景が浮かんでくる。作者は絵を良くするが絵では表せない情景であろう。同時作〈酒樽に水張る門かどの夜長かな〉にも上質の趣がある。

いわし雲国道沿ひのザ・めしや 波田美智子

「ザ・めしや」は長距離運転手などがよく利用する国道沿ひにある食堂である。当り前と言えはそれまでだが、「国道沿ひのザ・めしや」は簡潔で良い。「いわし雲」も良い。この作者としては発見の視野を広げた作品となつている。

裾分けに貫ひし矢田の栗の虫 小池 楨女

〈真心の虫喰ひ栗をもらひけり 子規〉があり、これは長塚節の子供から貰つた栗を詠っている。「真心」と言つた所に愛情も感じられる。掲句も同様であろう。「矢田」は作者と良い関りを持つている地に違いない。勿論俳諧味充分である。

(以下略)

恒星圈

大山文子

火祭の山の端にありいくさ星
篝火の一部始終に鮎下る
下賀茂や名残の萩に水の音
乾杯の間に噴いて来し土瓶蒸し
衝羽根の実の乗りて来し貴船駅

飯塚 糸子

岡 和絵

握りめし広げて昼や花千草
花蓼のつづき猿山天狗山
框まで闇あり鞍馬祭かな
その先の乗り場なりけり霧襖
茸山脇に座しゐる天狗山

雨あとの濁りに鮎の落つるかな
掌のなかの垂れ目の蝗むづかりぬ
蓮の実の飛んで日曜画家ひとり
芋虫の這ふ日まみれの蔵の壁
はらからに注ぐ順のあり新走

伊藤多恵子

奥田 節子

親と呼ばれること捨てたくて秋
かまつかを出し白猫の伸びしたり
いくばくの命秋蝶低く低く
経聞こえ来しマンシヨンの秋の昼
銀行の独身寮の曼珠沙華

朝鴉や支度はかどりゐる祇園
爽涼の流るる朝の先斗町
ひそやかに木の実の落つる高瀬川
焚付けのこつぱがにほふ日短か
杉の秀に口あけてゐる暮秋かな

獅子座

山尾玉藻推薦

堀 義志郎

山田美恵子

吉田康子

鞍馬口まで藪虱付きききたり
参禅の露けき髪を解きにけり
月光の蒲団の美しき父の閨
一握りほどの尾花の散りにけり

角切りの鹿の腑ぬけの顔なりし
庭の柿鴉に負けてしまひけり
冬ざれや舟より挿せる海苔の簀
草の花夫を亡くせし人とあり

永嶋みね子

松井倫子

一葉落つ山門裏の青電話
破蓮ちよつと口紅ひきなほす
皆の見る仁王の前の松手入
秋うらら猫は乳房を見せてをり

湖の香の彦根の辻や去ぬ燕
校庭の白線露を置きにけり
水底の草ゆれ釣瓶落しかな
木守柿逆光に目をつむりたる

堀 博子

土屋 醉月

死にたれば甲羅やはらか秋の暮
身に沁むや六腑ひとつを軽くして
水槽のガラス曇りし夜寒かな
錨揚ぐ音のしてゐる冬銀河

職退きてよりの歳月冬帽子
母の忌の星ひとつつ連れ小望月
鶏がらのふつつ煮ゆる冬隣
トーストの程よく焼けて風は秋